報告
report

山の力が地域を変える
～羊蹄山麓の広域景観ガイドライン形成～

小栗 真実
北海道大学大学院

Power of mountain changes region formation-Regional Planning guideline Mt.Yotei Area

1. 研究の背景と目的

地域が人口減少・高齢化、経済基盤の弱体化や財政悪化等の多くの問題を抱える中で、今後は地方分権化に伴い、都市や地域づくりの方向を「全国的統一性・均質性の確保」から、「地域的多様性・最適性の実現」に変化させていくことが重要である。その際に、地域固有の資源やストックを活かしながら個性豊かな活力に満ちた地域社会を実現していく「景観」を尊重した「美しい地域づくり／まちづくり」を行っていくべきであるという議論が高まっている。しかしこのような「景観」というテーマに基づいた活動や施策の多くが、建築群の形や色、看板や電柱の規制、沿道の花植えなどの街並を美しく整えるための表層的な美顔術で終わっているという現状も多々存在する。地域の「景観づくり」の本質が個性的で活力ある自立した地域社会の実現であるとするならば、その実現に向けて、個々の地域では単なる表層的な整備に終わらない取組みや「景観づくり」における新たな価値観づくりが必要であると考えられる。そこで本論では、北海道羊蹄山麓地域において展開された広域景観ガイドラインづくりの事例を取り上げ、多様なテーマの下で活動が展開されながら、地域の価値観が変化していく過程を分析し、今後の「景観づくり」に向けた新たな視点を抽出することを目的とする。

2. 地域固有の資源とは

本論では、社会資本に関する議論・文献を参考にしながら、地域の資源を捉える視点を、これまでの自然・地理的要素をベースに蓄積してきた都市基盤／産業基盤等の物的なものと共に、それらと人の関係や物を形成／維持／活用する中で生まれる協働関係等の非物的なものを含めて広義に捉えていくことが重要であると考える。よって、これらの物的な資源は非物的な資源によってつくられ、支えられていることが多いと言える。また、これらの地域資源は町村行政界を越えて広域で形成されることが多く、その利活用／維持管理（マネジメント）に向けては、自治体の枠を越えた広域的・総合的な取組みが必要とされる。

3. 広域景観づくりの定義

【本論における「景観」の概念規定】

これまで、「景観」の概念は多様な分野において様々な視点から説明されてきた。それらを踏まえた上で本論では、「景観」を「自然と人間の行為とについて、それぞれの中および相互の関わりのある有り様が物理的な現象として現れたものの総体」と定義する。さらに、その関わりのあり方から①山水、風物など自然そのもの（＝光景）、②人間が自然を利活用し、その結果現れてくる農地／林地／工業地などとそこでの生業の重なり合い（＝風景）、③暮らしやライフスタイルなどを支える生活環境とそこでの人間同士の交流や助け合いの重なり合い（＝情景）と分類し、これら3つから「景観」を捉えることとする。つまり「景観をつくる」ということは、表層を整えることだけではなく、自然環境や生業を守っていくことであり、そこでの人の暮らしを実現していくことである。

【地域資源のマネジメントと景観づくり】

以上のことから、物的資源を整備することから「光景」は生まれ、非物的資源を育みながら物的資源を整備することで「風景」が生まれるということがわかる。つまり、地域の資源をマネジメントしてすることは地域の「景観づくり」と密接につながる取組みとなることが考えられる。また、地域資源のマネジメントを通した景観づくりに向けては、①表層部の整備だけにとらわれず、目に見えない地域の産業やライフスタイルを守る取組みが同時に必要となってくること②行政界を越えて存在することの多い地域の資源に対しては自治体の枠を越えて、多くの人との関わりの中で広域的に取組みを進めること、が重要な点としてあげられる。

3. 北海道羊蹄山麓地域の概要

羊蹄山麓地域は札幌市の西約５０㎞の所に位置し、温泉やスキー場などを持つ北海道でも有数の観光地である。羊蹄山や尻別川をはじめとする豊かな地域資源を有し、大部分は農業地帯となっている。
近年では、海外資本によるリゾート開発により地域を取り巻く社会経済状況が変化し、廃屋や荒れた農地、不法投棄等の地域の景観を損なう事象が目立ってきている。